

## ザ・チャレンジ

(大学受験編)

2020年の「大学入試改革」へ向けて、すでに大学入試は変化しています。その一つの例が「英語外部試験の活用」です。

これまでの大学入試では「読む」「書く」を測る試験が中心でしたが、グローバル化の進展に伴い、英語でコミュニケーションを取る機会が高まっていることから、「聞く」「話す」を加えた4技能で評価する動きが進んでいます。

英語外部試験の利用方法は大学によって異なりますが、現在、最も一般的なのは「出願資格として英語外部試験による基準点(スコア)が設定され、それを満たした受験生は当日の英語の試験が免除される」というケースです。例えば、入試科目が英語・国語・地歴だった場合、大学が指定する基準点(スコア)を満たしていれば、国語・地歴の2教科で合否判定がなされます。また、英語外部試験の級やスコアに応じて一定の得点に「換算」したり「加点」する

ケースも見られます。

これらを利用した入試のメリットとしては、これまで「一発勝負」だったものが、英語外部試験は年に複数回実施されるものが多いため、目標とする級やスコアに向け、複数回チャレンジできる点が挙げられます。また、従来型の「一般入試」と「英語外部試験利用型入試」との併願を認めている大学も多く、受験機会が増えることにより、志望大学への合格の可能性も高まります。さらに、英語の得点が事前に確保できれば、英語以外の教科の勉強に集中することも可能です。

文部科学省も学校教育と大学入試において、英語の4技能化を進めています。一般入試における英語外部試験入試の先駆けとなったのは15年度に上智大学が採用した4技能対応型試験の「TEAP」でした。また、4技能化の流れを受け、16年度には「英検(実用英語技能検定)」が4技能化に対応

## Q. 大学入試の英語、どう変わる?

したスコア制を導入。「CSE2.0」と呼ばれ、国際基準規格のCEFRと関連性を持たせたユニバーサルなスコア尺度になり、これまで級の合否で判定していたものにスコアを併記することで、受験者の英語力をより細かく把握できるようになりました。

17年度入試より「CSE2.0」を採用する早稲田大学や明治大学のように、今後「英検」を採用する大学が増えていくでしょう。

まず自分の志望大学・学部の入試選抜方式に英語外部試験が導入されているか、さらにはどんな種類の試験が採用されているのか調べてみましょう。

(CG高等館 東進衛星予備校)

※幼児教育から各段階の進学対応まで、多様な学び、の情報を紹介。今回は小学校受験編。



東進TIMES 11.1号

今月号では、センター試験の得点率と合否の相関関係を分析

## A. 4技能評価、外部試験導入も